ドイツ社会をよりよく理解するために

——女性問題を中心にして——

村上　祐子

はじめに

外国語を学ぶ目的は，自分の思想や主張などを他文化圏の人たちに伝え，また彼らの持つそれらを正しく理解して，自分を豊かにするすべを身につけることであろう。私のようにドイツ語を学生に教える立場にある者は，単にドイツの言語を学生に覚えさせればそれですむわけではなく，言語の授業を通してドイツ人の社会の特質を理解させる必要がある。実際にまたドイツ語教師は学生にとっては，ドイツ語のみならずドイツそのものを知る「ドイツ通」なのだから，言葉の問題以外についてもさまざまな質問を受ける。そしてそれらはすべて，ドイツ人とつきあう際にあらかじめ知っておいたほうがよいと思われるものばかりである。

なかでも特に学生たちの関心が集まるのは，個人と社会との関わり方に，日本とどのような違いがあるか，何を知ればドイツ人と誤解なく相互理解ができるかという問いでもあろう。

大学の授業ばかりではなく，子どもの通う学校の親たちの会合でも，親たちから，「こんな問題について，ドイツ人はどう考えますか」などとよく質問され，それについての話を頼まれることも度々あった。

私に投げかけられたこの種の質問のなかでも，質問者の関心の強さが抜群であったのは，いわゆる「女性問題」だった。それは日本では同じ学歴であっても，社会生活の中で何かにつけて女性が差別されているという現実があり，これから社会に出て行こうとする学生も，大学を出て現に家庭を持ったり職場で働いていたりする人も，この問題について多くの矛盾を感じているからに違いない。勿論このような質問をするのは，主に女性である。そしてそのもっとも素朴な形は「日本の女性とドイツの女性はかなり違いますか」というものだが，実はこの問いは決して女性の生き方だけに限定されるものではなく，男性にとっても極めて重要な，普遍的な問題であることは明かである。

確かに現在では，世界の国々は近くなってきているし，国際化も進んでいる。そのような世の中で，ドイツと日本，あるいはドイツ人と日本人の違いを，ことさらに取り上げてのべるのは，何だか時代の流れにそっていないような気がするかも知れない。今日ではあまり，A の国の人だからこう，B の国の人はこう，という区別がつけにくくなりつつあるのは事実である。

だが実際のところ，人々は自分の生まれた国の歴史を無意識にせよ背負い，周りの生活環境を観察しながら成長する。そしてその中で，その人なりの考え方や感じ方を育てていく。従って，個々の国の持つ歴史や自然が違えば，そこに住む人々の感覚も変わってくる。

もちろん個々の受けた教育内容，そして成人になった時に受け入れられる社会環境など，同じ国の中でも個人差はあるが，ここではそれは一先ずおいて，個々の国の持つ教育システムと教育に対しての概念などの違いから生まれた，その国特有の女性像を取り上げて，見ていきた

いと思う。

「女の子は女らしく，可愛く」？

私はドイツで出産した。女の子が生まれたが，始めから女の子，男の子，という意識をまるで持たずに接し，ただ一個の人間としてニュートラルに接して育て，たとえば服なども私の知人たちの子どものお下がりを，男兒用女兒用の区別なく，借りて着せていた。ドイツでは，どっちみちすぐ着られなくなってしまう赤ん坊の服などは，友達の間で借りたり貸したりするのがあたりまえなのだ。

娘が一歳になった時日本に一時帰国したが，その時同じ歳の子をみて，あまりの違いにびっくりした。女の子はとっても女の子らしく，可愛らしく着飾っていたし，男の子も，一目で男の子とわかるかっこうをしている子が，圧倒的に多かった。そこには，その子の親や周囲が無意識のうちに，女の子も男の子もそれぞれに「可愛く」，そして女は「女らしく」男は「男らしく」，という心遣いをしているのが窺えた。そしてどの子も皆，見惚れてしまうほど，あまりにも可愛らしかった。

ドイツでは特別の時以外，あまり子どもを着飾らせたりしない。そして寒いので女の子にも，通常は動きやすいズボンをはかせる。従って子どもも，あまり自分の性を意識しない。可愛い飾りがついていたりスカートが短かかったりといった，子どもっぽさを強調した服もあまり出回っていないので，子どもっぽく着飾った子もほとんどいない。子どもたちは「自分は子どもで可愛いのだ」という事にさえ気がつかずに育つ。

女の子は思春期になるまで，あまり自分の事を女の子として感じていない。そのぶん思春期になると，突然化粧をしたり色々と工夫をこらしたりして，男の子の気を引こうと努め始める。学校に制服や特別な校則による規制もないので，一時期はかなり派手になる女の子が多い。それも一つの自己主張であり，大事な成長過程とみなされているわけである。この時期に女の子は，こうした手段で自己 PR をしながら強くなっていく。個人主義の社会環境で育ってきた彼女たちには，日本の女の子が持つような「控えめ」や「ゆずる」という感覚はない。弱いものは負け，強い者が勝ち進んでいく社会において，闘争心は生きていく上に必要で，かつ大切である。好きになった男の子に猛烈にアタックし，奪いあう。大人になる成長過程においては，ドイツでも日本でも女の子の方が早熟なので，イニシアティブをとるのは女の子だ。仲の良い子のボーイフレンドでも，平気で自分の方に向かせようと頑張る女の子を，私は子どもの頃からよくみてきた。そして日本の女の子とはかなり違うな，と驚いていた。だが今考えてみると，これはやはり周りの環境をみて育つ子どもたちの感覚が，その国々によって違った形をとることからくるのだと思われる。

自立と自律

こうして育った子どもが成長し，結婚年齢に達すれば，この違いはどのような形で現れるだろうか。たとえば，いくら日本でも最近は離婚率が高くなったとはいえ，周りを見渡してもそれほど日常茶飯というわけではない。これに反してドイツの離婚率は比べものにならないほど高く，母親が気を許していると，父親が隣に住んでいる女性と仲良くなっていた，ということだってあり得るのだ。子どもたちは日常普通に，大人たちのペアが変わっていくのを見て育つので，常に自分自身がしっかりしなければ大変な事になると，無意識の内に感じながら大きくなる。そしてその気持ちから，女性たちは強くなっていく。自分の選んだパートナーが違う人の所に行ってしまわないように，そして現在自分がおかれている環境が，今の状態より悪くならないように，常に気を張って生活していかなければならないからである。

それには何よりも，男性あるいはパートナーと経済面でも対等であることが望ましい。従って，女性が自立した仕事を持つのはあたりまえなのである。勿論男性側にも同じ事が求められているから，自立した女性と自立した男性のカップルには，子育てや家事が女性だけの役目であるという考えはなく，男性も女性とほぼ同じようにそれらをこなす。育児休暇は父親がとっても全くかまわないし，実際とっている男性も多い。お互いに協力しあって生活していかないと，現在の状態が維持出来ないのである。

人間の性格形成は，常にこの緊張感にさらされているといないとでは，かなり違ったものになるのは明らかであろう。

自己責任の生活感覚

このようにして，日本とは普段の生活感覚が違うドイツで生きていく女性は，日本で生きている女性とは生活感覚が大きく異なってくる。ドイツ人女性ばかりではなく日本人女性も，外国の社会の中で暮らすのであれば，その国の習慣や生活ルールに順応して生きていかねばならない。ドイツ人男性をパートナーとするのなら，強い女性はちょっと苦手という，ややマイルドな男性を選べば良いと言われるかも知れない。しかし個人主義の社会の中では自分というものをしっかり持ち，最後（死ぬ）まで自分の事は自分で責任をもって生きていかなくてはならない状況は，決してパートナーの性格によって変化するものではなく，ドイツ人の社会で生活するかぎり，それが至極あたりまえなのだ。

自分の行動に責任をとらなければいけないのは，すでに子どもの時期からである。なぜなら，社会のシステム自体が，すべてに自己責任を要求するからである。たとえば，歩いている時に車に轢かれても，また万一それが死につながっても，交通のルール上轢かれた側が悪ければ何の保障も出ない。ましてや，轢いた人が個人的に謝りに来たりお見舞いに来たりすることなど，絶対にありえない。あくまでも，ルールをまもらずに轢かれたのだから，轢かれたほうに責任がある，という考え方である。逆をいえば，歩行者は信号が赤であっても自分の判断で危なくないと思えば渡るし，横断歩道でない場所でも，自分が安全だと判断すれば平気で渡る。信号が赤だからといって，渡れそうなのに辛抱強く待つということはしない。しかしその一方で，一見して危険なことの明らかな，車の交通量の多い道を強引に渡ろうとする年寄りはいないし，突然横道から飛び出してくる子どもや自転車も珍しい。日本ではそれに比べて，もし人を轢いてしまったら，たとえそれがどんな状況であったにしろ，轢いた側の責任が問われる。それゆえ，歩行者より運転している側が常に注意をはらっていなくてはならない。これは極端に言えば，歩行者が車に撥ねられたら，歩行者が悪くても車の方に責任があるとされ，本当の違反者である歩行者は責任をとらなくてもよい場合もあるということになる。

同じように，もし電車の中で眠ってしまってバックをとられたらどうだろうか。それはもちろんとった人が悪いのだが，しかしドイツでは，自分の持ち物を取られたのに，寝ていて気がつかなかったほうにも責任がある，と言われる。自分の身体や持ち物は，自分自身で責任をもって守らねばならない。落し物や，忘れ物をした場合も，その人の責任である。日本の電車のアナウンスのように，いちいち親切に忠告してはくれないので，子どもたちも自然にしっかりする。

教育に関しても，日本ではわが子に一生懸命勉強をするように親が勧め，子どもの勉学に出来る限りのバックアップをするが，ドイツでは落第システムがあるので，もし子どもが6段階の成績評価で5や6（日本の5段階評価の1にあたる）を取れば，当然その子は落第する。しかしそれに対して親はとやかく言わない。この落第制度は小学校2年生から適用され，毎年平均全体の2～3%が落第（留年）する。落第したく

なければ子ども自身が自分から勉強する他ない。ただし，ここで大切な点は，落第という言葉が，日本のようにマイナスの響きを持っていないことである。したがって，子どもがもう一度同じ学年をやって基礎を固めたいと思ったら，それも出来るのだ。

いずれにしても，このようにドイツでは子どもの時から，男女の区別無く，しっかり考え行動し，自分の将来を選択していかなくてはならないのである。何の仕事をしたいかによってかなり早い時期から学校で学ぶ内容も変わってくるが，進学を含めて，学校制度や大学のシステムなどについては，後ほど改めて述べることにする。

さてドイツでも，1980年に職場における男女同権が法律によって確立されたので，同じ仕事をする場合，性別による賃金の差別はなくなった。しかし女性のほうが男性より，リストラの対象になりやすい可能性もあり，まだ完全に男女平等とは言い切れない部分も残っている。ただそうは言っても，日本の一部の企業のように，男性と同じ大学卒という資格を持って入社しながらお茶くみや使い走りなどをさせられることは無い。結婚退職を促されることも，絶対にありえない。有給育児休暇は3年間とれるが，この期間職場は確保されていて，いつでも復帰できるようになっている。これをみてもわかるが，日本よりもかなり働く女性には有利な仕組みになっていると言えよう。しかしそれだけに，女性もちゃらんぽらんには生きる事が出来ず，何に関しても男性と同じように，仕事に対しても真剣にとりくまなければいけないと言う事である。

女性と教育

ドイツの子どもたちは，だいたい12～13歳の頃に進学先の学校を決める。その種類は大きく分けて，基幹学校 (Hauptschule)，実科学校 (Realschule)，ギムナジウム (Gymnasium)，統合学校 (Gesamtschule) に別かれ，どれを選ぶかによって，将来の仕事の方向が決まってくる。学生が進学する割合は，順にほぼ20%，35%，35%，10%となっている。ただし一度決めても，後で別の学校に移ることは可能である。この時点で男も女も，自分はどんな仕事だったら出来るだろうか，何が自分に適しているかなどを真剣に考える。この時期，男の子は兵役の事も含めて，将来の自分の生活設計を自覚的にしっかり立てないと，実際に大変な事になってしまう。もし失敗してしまったら，誰も尻拭いも責任もとってくれない事を，若者たちは自分の身辺を見て，十分に分かっている。

ドイツは何事においても，資格試験を通って進んでいくシステムだ。大学で学ぶにも「大学入学資格」(アビトゥーア) をとる必要があるが，ドイツの大学はその殆んどが国立あるいは公立であり，大学間の格差はないと言ってよい。この資格さえとっておけば，大学に空席さえあればいつでも入学出来る。この試験は国家試験だが，大学進学希望者は高等学校を卒業する年に受験して，この資格を取るのが一般的である。そして直ぐに大学に入ることをしないで，先に兵役をすませる者もいれば，一年ほど勉強はお休みにして，世界旅行をすることもできるわけである。かつては大学入学資格をとってから直ぐに社会に出て働き，定年で退職してから大学生になるケースもあり，子育てが終わってから大学に入る女性もいる。

さて，大学で勉強する決心をすると，自分が何を学び何の研究をしたいか考えて，先生を選び大学を選ぶ。選んだ先生が期待外れだったら，又別の先生を探して移っていく。その場合，必ずしも別の大学に移らなければならないわけではなく，同じ大学の同じ学科内で先生を変えることも自由である。したがって，実力のある先生と無い先生とでは，授業を受けに来る学生の数もかなり違ってくる。私は音楽大学のピアノ科にいたが，実力のある先生が新しく入ってくると，同じ大学内で他の先生に就いていた学生

たちが，その先生のレッスンに殺到する。専門の実力や指導力の無い先生方は，配当された副科の学生しか教えられない事になってしまう。自分の実力を保持し，常にそれを示し続けなければ，たちまち弱い立場になってしまうのが実力主義の世界なのだ。同僚の間でも，女性だからといって労わられたり，特別扱いされたりすることはあり得ない。教わる方の学生も，あの先生は女性なので，ちょっと優しそうだし点数も甘いかもしれない，などと考えて受講する者はいない。そんなことをすれば，自分で自分の墓穴を掘るようなものだ。また，学生が自分の実力をつけるために，先生を自分の判断で選ぶというのも，日本とは基本的に考え方の違うシステムである。

ここでもわかるように先生も学生も，良い意味でも悪い意味でも，自分の蒔いた種は自分で刈り取るほかはない。能力のない先生に就いたと判断したら，すぐに自分にふさわしい先生を見つけて，勉強の体勢を立て直す必要がある。そして最終的には，自分に相応しい教授のもとで，目指す資格試験を受けることを教授が認めるまで研鑽し，資格をとってその段階の学業を終えるのである。

ここで一言付け加えておくと，この「資格試験」というのは卒業試験ではない。ドイツの大学では日本のように決まった数の単位をとれば卒業させてくれるというわけではなく，また卒業試験というものもない。大学には「卒業」などないのである。学生は数年間大学で学び，必要科目を修得し十分に実力がついたと確信できたら，専攻科目で試験を受ける。そして「フランス語教師資格」，「法律家資格試験」，あるいは「一般音楽教師資格」というような，職業技能者としての資格（ディプローム）を手に入れる。これらの資格試験は，すべて国家試験であって，これに合格した上で，さらに適当な職場に空き席ができるのを待ち，職に就く。

よい指導者に就いて勉強しなければ，自分の実力が上がらないことを学生自身が知っているから，学生も必死でよい先生を探す。良師と出会えるかどうかは，正に死活問題なのである。

さてそこで，もしも同じ大学には自分にふさわしい先生がいないと判断したら，学生はどうするか。もちろん別の大学に移る。さきに述べた通りドイツでは，入学資格さえあればどの大学にでも入れるし，大学間の格差は本質的に言って存在しない。だから学生は自分の求める先生のいる大学に，自由に移ることができるのだ。

ただ最近では学科によっては，入学希望者の数が受け入れ可能の限度を越すことがあり，その場合には空き席待ちやくじ引き，入学資格試験の成績による上位からの採用など，制度の本来のあり方に反することが行われているが，この「理想と現実のギャップ」が，今後どのように埋められてゆくか，極めて興味深いところである。

大学の制度と遍歴職人制度

大学生が自分に相応しい先生を求めて，場合によっては大学から大学へと移ってゆけるのは，もともと職人の遍歴修行の制度に由来する。

遍歴職人とは見習職人の期間を終わった後に各地を遍歴しながら見聞を広め，技術を磨いている，修業中の若者のことである。彼らは自分の腕を磨くのに相応しい場と親方を捜し，職人としての腕を磨いてゆく。そして最終的には，彼ら自身の実力が周囲に認められて初めて，親方になる試験を受けさせてもらうことが出来るのである。試験に合格したら，親方（マイスター）の称号を得て，周囲からも一人前と認められ，自分の工房を持つことが許されるという仕組みである。学生はもともと学問を職業とする職人であり，大学は彼らが技術を習得するための施設だったから，歴史的にみれば，学生の教育も職人の養成も，原理的には同じシステムなのは不思議ではない。

ドイツでは現在でも，職種によってはこの制度が生き続けており，どの職種であれ親方（マ

イスター）の称号は，人々の尊敬の対象である。また若者にとっても，マイスターになれることは最高の誇りである。なぜならばその称号は，自らの努力と力量によってのみ，獲得されるものだからであろう。

かつてはドイツでも，職人といえば男性の職業であった。現在ではこの原則が通用しなくなっていて，女性であっても本人の意志によって職種が選択できる。その結果この遍歴修行という制度も変化してきているが，しかし自己責任によって技能を獲得し，自分の価値を高めてゆくという考え方は，確固として生き続けていることを忘れてはならない。ドイツの女性はこのような意識を持つ社会の中で，女性だからといって差別されることもないが，逆に特権もなく，自力で自分の場を確保してゆかなければならないのである。

おわりに

一般に「ドイツの女性」という概念には，昔から一種特別なイメージがつきまとっている。すなわち彼女たちは貞淑な家庭の主婦の鑑のような存在で，真っ白なのりがきいたエプロンを身に着け，家中をピカピカに磨き上げ，窓を花で飾る。戦前そして戦後もまだしばらくのうちは，ドイツ女性と言えばすぐに，このようなイメージを呼び起こしたものだった。彼女たちはさらに，戦争直後まだ男性の少ない時期には，爆弾で壊れた町の瓦礫の中から石を一つ一つ整理して積み上げ，家々を再建し町並みを復興した。そうした姿はよく戦後のドキュメンタリーフィルムでも観られる。ドイツの女性はおおむね体格がよく，体つきも大きいので，力も男性に引けをとらないぐらい強い。てきぱきトロッコに瓦礫を積んで運ぶ女性の姿は，日本の戦後の映像とは対照的で印象深い。戦争で敗れ身も心もボロボロになって戻ってきた夫を励まし，子どもを育て，家庭の大黒柱となって必死に生活を支えた。

第二次世界大戦がドイツ人に，色々な面で精神的に大きなダメージを与えたことは間違いない。ナチス政府がユダヤ人に対してした事が次から次に公になり，ドイツ人という人種全体が世界的に非難の的になり，国全体で自分達がやった事に対して責任をとってゆかなくてはならなくなった。あれは民衆の知らなかったことだと言っても，それですまされるような状態ではなくなっていた。ドイツ人が長い歴史の中で築き上げてきた伝統を守りつつ，民族の誇りを失わず，しかも自国が犯した罪を背負って生きてゆくのは，実に大変なことであった。

しかしドイツ人は見事にそれをなしとげた。周囲からの圧力につぶれる事なく，ドイツの良き伝統を自ら否定せず守りながらも，彼らは自分達の先祖がやったあやまちを二度と繰り返さないように忘れないように努力し，ユダヤ人には出来る範囲で今も謝罪し続けている。（充分でないと言う人もいるかもしれないが，公に罪を認め，謝罪する事が大事だ。）ドイツの国に政治的に逃げてきた人や難民なども，積極的に受け入れている。これはかつて，ナチスに思想的に反対し，処刑されそうになって国外に逃れようとしたり，ナチスの支配下では自由に仕事をすることができないので他国に移住しようとしたドイツ人たちが，自分たちを受け入れてくれる国がなかなか見つからなかったり，経済的な条件をそなえていなければ入国を拒否されたりした，苦い経験があるからである。

戦前，戦中，戦後に夫を支えて奮闘した「貞淑なドイツ女性」の強さは，その後の社会においては「自立し自律するドイツ女性」の強靭な精神力と行動力に変容した。しかしながら，このような従来の「ドイツ女性」という観念が，今日ではもはや通用しなくなってきているのも事実である。東西ドイツの分裂と再統一，外国人労働者の受け入れとそれに伴う外国人人口の激増，とくにイスラム文化圏から来た人たちが，彼ら自身の生活習慣と価値観を変えずにドイツに住みついていることなど，さまざまな理由か

ら，ドイツはもはやドイツ人だけが生活する社会ではなくなった。そして女性が社会で果たす役割も次第に変化している。他文化圏の生活感覚で生きる女性たちが多くなれば，ドイツ人女性といえどもその影響を受けないですごすのは困難である。現実に，ドイツ女性の価値観や生活態度には変化が生まれており，これから先もその変化は進んでゆくだろう。

女性たちがこのように歴史を担いながら，社会的な変化を経験しつつ生きている国に，もし日本で育った女性が行って，そこで生活をするとき，どのような覚悟がいるだろうか。そのあたりのことを自覚することから，実は本当のドイツ理解の第一歩が始まるのではないかと思う。